●＜症例＞

イレウス症状により発症した
静脈硬化症の2例

春木聡美¹⁾ 五十嵐正広 吉澤 繁 佐田美和
小林清典 勝又 伴栄 西元寺克禮 岡安 勲²⁾
三富弘之³⁾

¹⁾北里大学東病院／消化器内科, ²⁾同／病理, ³⁾相模原病院／病理
【Key Words】静脈硬化症, イレウス

和文要旨

症例はいずれも60代の女性でイレウスを伴い発見の動機となった。病変は右側結腸を主とし、内視鏡所見では暗黒色の浮腫状粘膜とびらんを伴い特徴的な色調を呈する。組織所見では毛細血管の増生と血管周囲に膠原線維の増加を認める。腹部単純写真やCTにより結腸壁の走行にそった静脈に石灰化が証明されれば診断は容易である。本症は、比較的稀であるがイレウスを発生する疾患として認識しておくべき疾患である。

症 例

症例 1

患者：63歳，女性。

主訴：臍周囲痛。

現病歴：2000年3月健診にて便潜血を指摘され，近医で大腸内視鏡を施行。上行結腸から下行結腸に大腸粘膜の暗黒色化，びらん，潰瘍を指摘され，2000年4月17日当科紹介受診。経過観察中，腹痛出現し，腹部単純にてニボー像を認め，イレウスの診断で入院となった。

既往歴：31歳虫垂炎，32歳肺結核。

入院時現症：身長156cm，体重58.5kg，血圧150/98mmHg，体温36.6℃，脈拍80/分，腹部所見：腹部膨隆，筋性防御なし，グル音亢進，自発痛・圧痛あり，腫瘤触知せず。

入院時検査所見：WBC 11,000/mm³，CRP 1.2mg/dlとLDH 622 IU/lの上昇を認めた。

腹部CT所見：右半結腸に局限した消化管壁の肥厚を回盲部に認め，静脈と思われる部分に石灰化を確認した（Fig. 1）。

大腸内視鏡：盲腸から横行結腸の血管透見やハウストラが消失。粘膜は，暗黒色調を示し，散在性にびらん，小潰瘍を認めた（Color 1）。

Fig. 1 Abdominal CT showed thickened colonic wall and calcification of the vein at the cecum to the ascending colon.

Fig. 2 Histological findings of the colonic mucosa revealed thickened venous wall with proliferation of collagen fiber on HE standing.

病理組織学的所見：大腸粘膜の生検所見では，粘膜固有層の毛細血管の増加，血管周囲に膠原線維が増生していることより静脈硬化症と診断（Fig. 2）。

症例 2

患者 64歳，女性。

主訴：腹部膨満感。

現病歴：54歳頃より高脂血症にて外来受診していた。2003年11月13日より腹部膨満感や嘔吐が出現し，11月16日イレウスにて緊急入院となる。

既往歴：30歳子宮筋腫にて手術。54歳高脂血症。

入院時現症：身長150cm，体重46.8kg，血圧162/82mmHg，体温37.8℃，脈拍92/分，腹部膨隆，自発痛・圧痛なし。

入院時検査所見：WBC 1,1000/mm³，CRP 3.9mg/dlと炎症反応の上昇を認めた。

腹部単純X線所見：上行結腸に一致する部位に線状から網目状に石灰化を認めた（Fig. 3）。

腹部CT所見：上行結腸血管壁の石灰化を認め，石灰化に一致して腸管壁の肥厚を認めた。

大腸内視鏡所見：横行結腸中部から口側の腸管の粘膜は暗黒色でびらんの散在を認めた（Color 2）。

病理組織学的所見：毛細血管は増殖しており，血管周囲に血管を取り囲むように膠原線維が増加しており，

Fig. 3 Plain abdominal X-ray film showed linear calcification (arrows) at the ascending colon.

Fig. 4 Histological examination showed increasing vessels and collagenous fibers in the mucosa on HE stainings.

静脈硬化症と診断した (Fig. 4)。

考 察

静脈硬化症による虚血性腸病変は、1991年小山ら¹⁾により、「慢性的経過を呈した右側狭窄型虚血性大腸炎の一例」として報告され、その後1993年岩下ら²⁾により静脈硬化症に起因した還流異常による虚血性腸病変であるとし、新しい疾患概念として提唱された。

静脈硬化症の特徴は、病変部大腸壁内～腸間膜静脈に石灰化が観察される点である。また、初期には盲腸から上行結腸に限局発症し、経過とともに次第に肛門側に進展すると考えられている。回腸末端部病変を除き、小腸や上部消化管には異常は認めない³⁾。大腸内視鏡の特徴として、ハウストラは消失し、病変部の粘膜は、暗黒色調を示し、散在性にびらん、小潰瘍を認める。

病理所見では、粘膜固有層の毛細血管の増加、血管

Table 1 Summary of the reported cases of phlebosclerosis of the colon in Japan.

1) Mean age: 62.8±11.3 years old		5) Location:	
		ileum end to transverse colon	2
		ileum end to descending colon	1
		cecum to ascending colon	18
		cecum to transverse colon	35
		cecum to descending colon	14
		cecum to sigmoid colon	3
		unknown	3
2) Sex : Male 24		6) Past history:	
Female 38		Chronic hepatitis, Liver cirrhosis	9
		Hypertension	7
		Diabetes mellitus	3
		Hyper lipidemia	1
		(-)	19
		another	23
3) Symptoms:			
abdominal pain 27			
ileus symptoms 14			
diarrhea 4			
another 17			
4) Average sick period:			
9.1±16.4 months			
(0-6year)			

周囲に膠原線が増生していることより静脈硬化症と診断される。

静脈硬化症の本邦報告例は、1991年から2004年の間で医学中央雑誌で検索しえた限りでは62例であった (Table 1)。

平均年齢は62.8±11.3歳で、男女比は24:38と女性に多い。臨床症状としては、腹痛、イレウス症状といった急性腹症が多い。診断までの平均病期期間は9.1±16.4カ月と比較的長く、病変部位は右半結腸に多い。基礎疾患のない症例もあり、特定の疾患との関連性は指摘されていない。我々が経験した2例は、いずれもイレウスを起点として診断されており、イレウスの原因疾患の1つとして静脈硬化症も念頭においておく必要があると考えられた。

文 献

- 1) 小山 登, 小山 洋, 花島徳三ほか. 慢性的経過を呈した右側狭窄型虚血性大腸炎の一例. 胃と腸, 26: 455-60: 1991.
- 2) 岩下明徳, 竹村聡, 山田 豊ほか. 原因別にみた虚血性腸病変の病理形態. 胃と腸, 7: 1-15: 1993.
- 3) 高橋成一, 樋渡信夫. 虚血性大腸病変. 日本大腸肛門病会誌, 54: 926-931; 2001.

〈カラーは7頁に掲載〉

Two cases of phlebosclerosis of the colon with ileus

Satomi Haruki ¹⁾	Masahiro Igarashi
Shigeru Yoshizawa	Miwa Sada
Kiyonori Kobayashi	Tomoe Katumata
Katsunori Saigenji	Isamu Okayasu ²⁾
Hirokyu Mitomi ³⁾	

¹⁾Dept. of Gastroenterology, ²⁾Dept. of Pathology, Kitasato University Hospital. ³⁾Dept. of Pathology, Sagami Hospital.